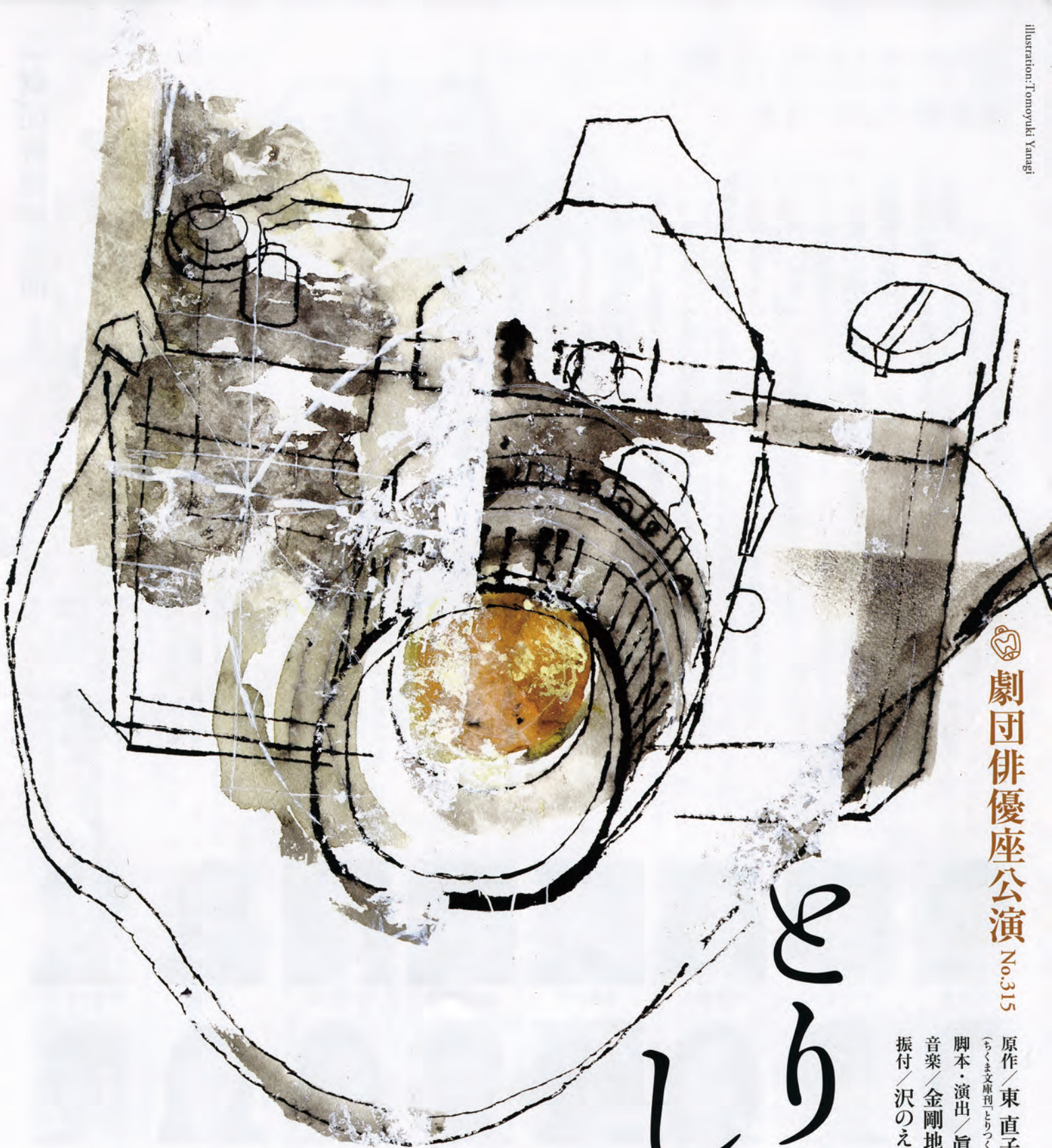


illustration:Tomoyuki Yanagi

劇団俳優座公演 No.315

とりつくしま

原作／東 直子
（ちくま文庫刊「とりつくしま」より）
脚本・演出／眞鍋卓嗣
音楽／金剛地武志
振付／沢のえみ

美術／杉山 至
照明／榊 美香（アイズ）
音響／天野高志
衣裳／伊藤早苗
ドラマトゥルク／野村政之
演出助手／落合真奈美
舞台監督／宮下 卓

主催／㈲俳優座

2013年
4月13日(土)～24日(水)
シアタートラム(三軒茶屋)
劇団俳優座 03-3405-4743・03-3470-2888

阿部百合子
荘司 肇
中吉卓郎
片山万由美
加藤佳男
斉藤深雪
山下裕子
河内 浩
清水直子
佐藤あかり
若井なおみ
野々山貴之
野上綾花
福原まゆみ
田中孝宗
仙名翔一

劇団俳優座公演 No.315

とりつくしま



死んで心残りがある人は、
この世にあるなにかのモノを「とりつくしま」にできる。
死んでしまったあなたに、「とりつくしま係」が問いかけます。
心残りはありませんか？
なにかモノにとりついて、
一度だけこの世に戻ることができますよ。
さあ、あなたはなににとりつきますか？
大好きな人の？大好きな人のなににとりつきますか？
でも、とりつくだけです。見守るだけですよ。
切なくてちょっぴり苦い、不思議な物語。
温かくて哀しくて、ほんの少しおかしくて、
心に染みる東直子の人気小説をついに舞台化！

原作――東 直子（ちくま文庫刊「とりつくしま」より）
脚本／演出――眞鍋卓嗣
音楽――金剛地武志
振付――沢のえみ
美術――杉山 至
照明――榊 美香（アイズ）
音響――天野高志
衣裳――伊藤早苗
ドラマトゥルク――野村政之
演出助手――落合真奈美
舞台監督――宮下 卓
グラフィックデザイン――阿部 壽
イラスト――柳 智之
Web協力――富澤玲子
制作――下 哲也
高橋かずえ
水野陽子
主催――㈲劇団俳優座

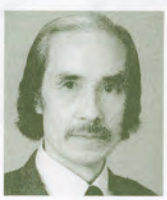

河内 浩


山下裕子


斉藤深雪


加藤佳男


片山万由美


中吉卓郎


荘司肇


阿部百合子


仙名翔一


田中孝宗


福原まゆみ


野上綾花


野々山貴之

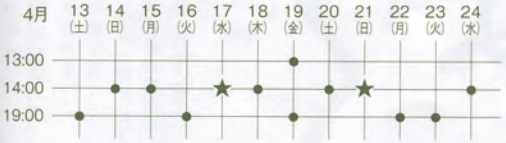

若井なおみ


佐藤あかり


清水直子

2013年 **4月13日(土)～24日(水)** 開演時間：昼13:00・14:00／夜19:00

シアタートラム(三軒茶屋)



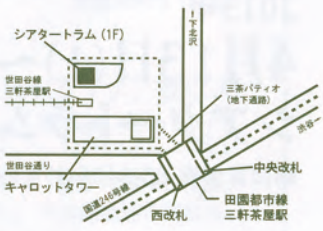
★＝アフタートークあり（4月17日・21日公演終了後）

前売り開始 2013年3月4日(月)

料金：一般 5,250円／学生 3,675円
(全席指定・各税込)

◎前売場所
劇団俳優座 03-3405-4743・03-3470-2888
チケットぴあ 0570-02-9999 http://t.pia.jp/ (Pコード：426-231)
ローソンチケット 0570-000-407 http://l-tike.com/ (Lコード：34050)
Confetti(カンフェティ) http://confetti-web.com/
世田谷パブリックシアターチケットセンター 03-5432-1515 http://setagaya-pt.jp/
※車椅子スペース・託児サービス有（お問合せは劇場まで）

◎お問い合わせ
劇団俳優座 03-3405-4743・03-3470-2888 (10:30～18:30 日・祭日除く)
http://www.haiyuza.net
http://www.manabeck.com/toritsukushima



シアタートラム
東京都世田谷区太子堂4-1-1
03-5432-1526
東急田園都市線三軒茶屋駅
世田谷線三軒茶屋駅となり

DIALOGUE
Naoko Higashi & Takashi Manabe

「とりつくしま」舞台化記念対談
東直子&眞鍋卓嗣

――今回は東直子さんがこの小説を書こうと思ったきっかけや、この小説をなぜ舞台化しようと考えたのか脚本・演出の眞鍋卓嗣さんにもまずこの小説の面白さを語ってもらおうと思っています。

最初は怪談？

東　この小説を書いたきっかけは、筑摩書房の編集の方に小説の連載をしてみませんかと声をかけられたことなんですが、なぜか、なにか怪談みたいなものを書きませんかと提案されたことがきっかけだったんです。

眞鍋　怪談ですか？

東　そうです。死んでしまった人が何かこの世のモノにとりついて、モノの視点で世界を眺めてみる。死者の視点といっても幽霊ではなくて、もう命の無いモノでこの世を眺めたらどんなふうになるかということを考えたのがきっかけですね。「Webちくま」での連載だったんですけど、2週間にいちど更新していました。そして半年くらい更新し続けて。一気に書き上げたという感じだったですね。

眞鍋　月2回、大変だったんじゃないですか。

東　大変でした（笑）。実は、小説の連載は初めてだったんです。一編書き上げたらすぐに次の締切がきてしまうので、毎日のように亡くなった人のことを考えていました。

眞鍋　精神的には辛かったんじゃないですか。

東　ええ、書く方には精神的に辛いものもありました。すべて亡くなった人の一人称で、その人の気持ちに寄り添いつつ書いていったので、気持ちが引きずられて。でも、辛い小説にするんじゃなくて、モノになってみつめるという設定で、客観的な視点で死を考えるっていうものにしたかったんです。いろいろな「もしも」を味わえるように、一回ごとの主人公の年齢とか性別や状況を様々に設定して、それぞれの人の心を丁寧にすくい上げるように書いてきたつもりです。その中で、生きている状態でこの世を眺めるのと、モノになってこの世を眺めるのとはどうちがうのか、ということを模索しながら書いていきました。

「とりつくしま」との出会い

眞鍋　僕は最初、2007年の雑誌「ダヴィンチ」の「今月の絶対はずさない！プラチナ本」のコーナーでこの作品を知ったんです。編集の人みんなが褒めていたので是非読んでみようかと。

東　「ダ・ヴィンチ」の編集者が全員一致でないと「今月の絶対はずさない！プラチナ本」にならないということで、とても嬉しかったです。

眞鍋　最初読んだときはそうでもなかったんですが、日がたつにつれて舞台化をしたいなと思うようになりまして。

東　ありがとうございます。

眞鍋　小説なんですけど二つの歌というか、音楽を聞いているみたいな感じでもあるし、そういう小説にあまり出会ったことがなかったので、舞台化してみたらどうなるのかな、と。最初はメールでお願いしたんですよね。

東　ホームページのアドレスから届いたメールを見てちょっと驚いたんです。シェイクスピアなどを上演する新劇の老舗の劇団（俳優座）からの、私の小説の舞台化のオファーというのはとても意外でした。

眞鍋　最初は断られるかなとも思ったんですが、承諾していただいて。この小説を読んだのは2007年だったんですけど、震災以降の世の中でなにを舞台にしたらいいのかと考えた時に東さんのこの小説がいいかなと…。

朗読・ラジオドラマ、そして舞台…

東　この本が出てすぐに、何件も朗読をしたいという申し出があったんですよ。書いていたときは他の形になることは全然考えていなかったので、意外でしたが、本当にいろいろなところから申し出があって。ラジオドラマになったこともありますし、そういう需要がある話だったのだな、とあとで理解しました。朗読のサークルの方からプロのアナウンサーまで、この小説を声に出して読んで、いろいろな形で楽しんでくれているようです。

眞鍋　東さんご自分でも読みますよね。

東　そうですね、私も自分でもときどき朗読をします。小説やエッセイ、短歌など、ライブハウスや本屋さんのイベントなどで。私は、学生時代に演劇に関わったことがあって、舞台に立ったこともあるのですが、短歌をする人は演劇にも関わっている人がなぜか多い気がします。短歌は一人称の文学と言われていて、一人で語る、という部分が芝居のモノローグに似ているのでしょうか。同じ短歌作品でも、声に出して読むと、読む人のたたずまいや声の質などで、活字のときとは随分印象が変わるんですよね。舞台で実際に生身の俳優さんが声を出し、どう演技をするのか、小説が三次元になったときに、どんな迫力が加わった舞台になるのか、とても楽しみです。

眞鍋　この小説には「とりつくしま係」とか、動けないモノになってしまう死者が出てきますよね。「とりつくしま係」なんかはいろんな形状で出てきて人間の形をしていない。映像とかで視覚的にもいろいろと表現出来ると思うけど、やっぱり俳優でやりたいと思っています。死んでしまって、生きている者には届かない心の声をどう舞台で身体的に表現するか、難しいとは思いますが舞台化にあたっては演劇の可能性や表現を広げていく作品にしたいと思っています。

自由のきく空間で…

東　今回、舞台空間で自由のきく劇場を選ばれたとか。

眞鍋　シアタートラムですね。俳優座でも初めて使う劇場ですね。200席ちょっとの劇場なんですけど舞台空間を自由に使えるというか。今度はマイムの方にも参加していただいて、小説に出てくるモノをどう身体的に表現できるか可能性は大きいと思っています。

東　言葉には書かれていない部分が、舞台の上で立体的にどんどんふくらんでいってくれそうで、とても楽しみです。

眞鍋　是非多くの方に観てもらいたいと思っています。

東・眞鍋　劇場でお待ちしています。

◎「とりつくしま」公演を記念して「とりつくしま短歌」を募集します。詳細は俳優座のホームページ、もしくは特設サイトをご覧下さい。
http://www.haiyuza.net
http://www.manabeck.com/toritsukushima



東直子（ひがしなおこ）
1963年、広島県生まれ。歌人、作家。神戸女学院大学在学中に演劇活動を行う。1996年、「草かんむりの訪問者」で第7回歌壇賞受賞。2006年に初めての小説「長崎くんの指」を上梓し、話題となる。『とりつくしま』は2作目の小説。歌集に『春原さんのリコーダー』『青卵』『東直子集』『十階』、小説に『さようなら窓』『薬屋のタバサ』『私のミトンさん』『トマト・ケチャップ・ス』『キオスクのキリオ』、エッセイ集に『耳うらの星』『千年ごはん』、共著に『回転ドアは、順番に』『短歌があるじゃないか。』『ひとりの夜を短歌とあそぼう』、絵本に『あめ ぽぽぽ』『うみ ざざざ』などがある。また、「ロビンソン×ロビンソン」等、ミュージカル脚本の執筆もある。



眞鍋卓嗣（まなべたかし）
1975年生まれ。東京都出身。大学在学中から音楽活動、演劇活動を平行して始める。1998年に自身のバンドでメジャーデビュー、2001年まで活動。2002年俳優座研究所入所。劇団俳優座文芸演出部所属。演出家として活動中。
【主な俳優座演出作品】『犬目線／握り締めて』（作：スエヒロケイスケ）・『制服』（作：安部公房）『ある馬の物語』（原作：レフ・トルストイ「ホルストメール」、脚色：マルク・ロゾーフスキイ、訳：桜井郁子）・『ヒメハル～ヒメジョオン・ハルジオン～』（作：スエヒロケイスケ）・『かもめ』（作：アントン・チェーホフ　英訳：マイケル・フレイン、訳：小田島雄志）ほか

『とりつくしま』舞台化によせて

視線の静けさ

未練でも執着でもない、“見守る”という在り方。相手と直接やりとりすることはできず、でもあたたかな視線を向け続ける。この静けさこそが、『とりつくしま』の根幹にあると思う。小説では、歌人である東直子さんの、簡潔に研ぎ澄まされた文章で表現されていた静けさ。果たして舞台ではどのように描かれるのか、本当に楽しみです。

関口靖彦
（本とコミックの情報誌『ダ・ヴィンチ』編集長）

「とりつくしま」に魅せられて

親しい人が逝く度に、叶わぬと知りつつ願わずにはいられません。死は消滅することではないという証拠を、たとえ僅かな痕跡でもいいから残していって欲しいと。そんな時、東さんの「とりつくしま」という比類ない発想に不思議な安らぎを覚えました。四十年以上も書く側にいた私が、初めて朗読してみたいという衝動に駆られたほどです。

この珠玉の短編集が、どのように脚色され、上演されるのか、考えただけで胸がときめきます。舞台に接した人の誰もが、あらためて死者それぞれの「とりつくしま」に想いをめぐらせ、先だった人々に見守られて生きる幸せに気づくことでしょう。

心から楽しみに“開幕の時”を待っています。

山崎陽子
（童話作家・ミュージカル脚本家）

この世のロスタイム

東直子さんの連作小説集『とりつくしま』の主人公たちは全員死者、それも死にたてのほやほやである。命が尽きたところから始まる物語という発想にびっくりする。死んだら終わりじゃなかったんだなあ。「夫のマグカップ」や「母の補聴器」や「孫のカメラ」や「自宅のリビングのマッサージ機」などの身近なモノたちに取り憑いて生きる。そんなこの世のロスタイムがあったとは。彼らはこの特別な時間にはたして何を思い、どう行動するのか。その様子を思わず覗きたくなるのは、「夫のマグカップ」なんていかにもヤバそうだから。「母の補聴器」なんてあまりに悲しいから。またそれらによって、今ぼんやり毎日を送っている私自身の生が照らし出されるから。

さらに今回の舞台化においては、このとんでもないお話を生身の役者さんたちが演じてみせてくれるのだ。原作のどのエピソードが、どんな風に演じられるんだろう。するのか変身。なんとも楽しみだ。

穂村弘（歌人）

余白の行く末

東直子さんの書く物語は、静けさの中に激しさを秘めているところが、たまらなく好き。そして、とても芝居的だなと思うのです。余白がある、というか。余白を与えてくれるお話は、とてもいいものだなと。読み手側は、そこに思いを馳せる。このお話が舞台になったとき、その余白の行く末はどうなるんだろう。楽しみです。

ともさかりえ（女優）

東直子の本



とりつくしま

ちくま文庫
定価 609 円（税込）

あなたは何に「とりつき」ますか?
死んだあなたに「とりつくしま係」が言う。モノになってこの世に戻れますよ。妻は夫のカップに、弟子は先生の扇子になった……。珠玉の連作短篇集。【解説＝大竹昭子】

キオスクのキリオ

最新刊!
単行本　定価 1,680 円（税込）
「人生のコツは深刻になりすぎへんことや」。不思議な連作短篇集。

回転ドアは、順番に

共著者＝穂村弘　ちくま文庫　定価 609 円（税込）
気鋭の歌人ふたりによる恋愛問答歌。自作解説付き。

筑摩書房　＊お問い合せは 筑摩書房サービスセンターまで　〒331-8507 さいたま市北区櫛引町2-604　TEL 048(651)0053　FAX048(666)4648　http://www.chikumashobo.co.jp/